

気象衛星写真による台風6807, 6809の雲分布**

(飛弾川豪雨の日の雲分布)

岡 林 俊 雄*

昭和44年8月7日9時、北緯24度東経155度で弱い熱帯低気圧 (Tropical Depression) から台風になった台風7号は珍らしいコースを通り16日朝鮮付近から日本海に入り17日9時には北海道西方海上まで進んできた。

いつぼう17日9時に日本のはるか南の北緯17度東経130度付近に弱い熱帯低気圧がありこれも翌日台風になった。

さて8月17日前後の気象衛星 ESSA 6号の写真を見ると、15日から二つの台風を連結するような長大な帯状雲があらわれ、17日はそれが特に顕著になってきた。その写真が第1図である。なおこの帯状雲は翌18日も存在している。

写真の中で、左上の Former S.T.S 6807 とあるのが台風7号。左下の T.D. (T.S. 6809) とあるのが台風9号である。

さて写真をみると台風7号と9号をあたかも連結するような帯状雲はちょうど日本列島を縦断しておりその長さは3,000kmにも及んでいる。富士山レーダーはじめこの雲の通りみちにあたるレーダー官署は非常に強い (Very strong) エコーや強い (Strong) エコーを観測している。それを写真の中に入れておいた。V.S とあるのが Very Strong の、S とあるのが Strong の略でその下の数字はエコーの上面の高さを示す。

天気図を参考にして写真の解釈および注目すべきことを要約すると、

1. 二のこの台風は数千 km 離れているにもかかわらず、帯状雲はひものようになってそれを結んでいる。この現象はこの台風にかぎらずしばしば観察されることである。

2. 700mb面の流線解析をしてみたら、この帯状雲の位置走向は流線の方向および集中と一致している。この帯状雲の中間付近には流線の中立点があるはずであるが、雲がほとんど切れていないということから、側面収束が相当に強いと推定される。

3. この帯状雲が日本列島にぶつかるとそこにしばしば大雨を降らせるが、この帯状雲の走向と同じ方向に地形収束するような地域ではその効果も加わって特に大雨になる可能性がある。この日の飛弾川豪雨はそれでないかと考えられる。

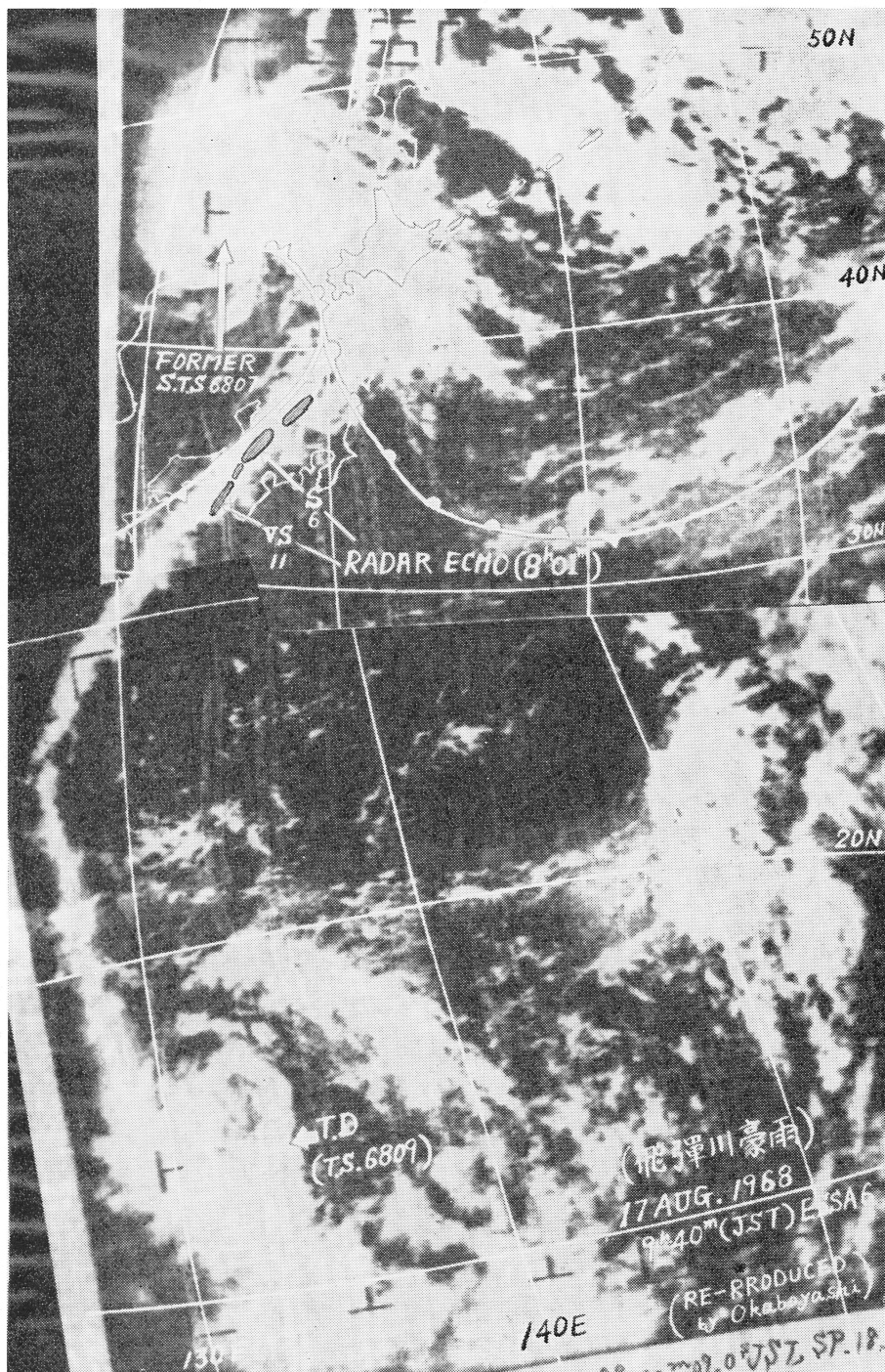
4. この長大な帯状雲は連続的に水蒸気を降雨域に送りこむ輸送管のような役割をしていると考えられる。ただし、ここでいう連続的とは比較的長時間についてであって短周期の断続性や強弱はもちろん存在すると考えられる。

5. この帯状雲は上層雲か下層雲か、または上、中、下層雲と共存しているのかの判定は現在はかなりむずかしいが、少なくとも南北両台風の近くは上、中、下層雲が共存しているとみなされる。

おわりに、この報告作製については多くの人に討論して頂いたが特に予報課長久米庸孝氏には多忙な時間をさいて御指導御検閲をいただいた。

* T. Okabayashi 気象庁予報課

** A Stellite picture of long band-Shaped Cloud Pattern Connected Typhoon 6807 and 6809 (Caused heavy rain around Hida-river, Gifu Prefecture on 17 Aug. 1968))



第1図 飛弾川豪雨の日の気象衛星写真 . ESSA 6, 9^h40^m09^s, 17 Aug. 1968